

- 本当に安全な食べものを手渡すために
- 「だれが・どこで・どのようにつくったか」の情報を日本一公開します。
- 「国産」「無農薬」にこだわり、日本の伝統食を守ります。
- 原料段階・飼育段階からポストハーベスト農薬、遺伝子組み換え、放射能汚染、トランス脂肪酸、食品添加物などを徹底的に追放します。
- プラスチック容器・レトルト食品を追放します。

## 生活用品

# 家族やペットを優しく守る 「菊花せんこう」

## (株)りんねしゃ

文責 宮尾 岳司(オルター企画部)

「ふ~ん」という耳障りな羽音、そして気づけば体についた赤い痕。そんな時にシットンスプレーしてパタッと虫を落とせる殺虫剤。それ、危険な「家庭内農薬」になっていませんか? 今回は大切な家族やペットを天然成分で優しく守る「菊花せんこう」をご紹介します。

### 天然成分の防虫せんこう

りんねしゃの「菊花せんこう」は、天然の除虫菊を主原料とする、人にも環境にも優しい製品です。虫を殺さずに優しく追い払うため、化学物質に敏感な方やペットがいるご家庭に特におすすめです。使用原料は除虫菊粉末、粕粉、タブ粉、でんぶん、木粉、薄荷、陳皮など、天然植物由来のみ。農薬、合成香料、着色料は一切使っておらず、植物そのままの色と素朴なアロマが特徴です。原料栽培から製造販売、消費まで一貫した管理体制を構築することで、安心と安全を最優先しています。

りんねしゃは、国の定める殺虫成分基準量に疑問を持ち、あえて医薬部外品ではなく「防虫線香」として販売しています。医薬部外品の蚊取り線香とは異



ケニアの除虫菊生産者の方々

### りんねしゃの 菊花せんこう

#### ●製品仕様

- アロマで防虫 菊花せんこう 標準  
13g×30巻 燃焼時間:無風状態で1巻約6時間
- アロマで防虫 菊花せんこう 長時間用  
18g×20巻 燃焼時間:無風状態で1巻約9時間
- アロマで防虫 菊花せんこう 角型ミニサイズ  
6g×32巻 燃焼時間:無風状態で1巻約3時間

#### ●原材料

除虫菊粉末・除虫菊粕粉(ケニア産 総ピレトリン0.1%)、タブ粉、でんぶん、木粉(北海道産白樺・福岡県産ひのきなど)、薄荷、陳皮(和歌山県産)



りんねしゃの飯尾 裕光専務(左)と  
ケニア国スブキア地区ユニオン代表のジョセフさん(除虫菊生産者)

なり、総ピレトリン含有量が低いため「お香・雑貨品」に分類されますが、公的機関での蚊の吸血阻止実験でその確かな忌避効果が証明されています。

### 開発のきっかけは実体験から

りんねしゃの「菊花せんこう」は、創業者である飯尾純市氏の父親が化学物質過敏症で市販の蚊取り線香を使えなかったこと、そして飯尾氏自身の化学物質過敏症の経験から、家庭用殺虫剤の安全性に疑問を抱いたことが開発のきっかけです。天然除虫菊を主成分とし、市場から減少しつつあった除虫菊の蚊取り線香を存続させたいという強い思いから、製品化への挑戦が始まりました。

製品化には多くの課題がありました。製造資金の調達、安定した原料の確保、日本の薬事法の規制クリア、そして人や自然に最適な除虫菊の配合割合の追求など、多岐にわたる困難を乗り越えました。「蚊取り線香」の名称が使えない中でも、丁寧な説明を通じて消費者の信頼を得ていきました。また、開発情報を公開する中で業界や行政からの不当な圧力に直面しましたが、消費者の理解と支援を得てこの困難を乗り越えました。

当初は日本に除虫菊栽培農家がいなかったため、中国の農家と契約栽培を行い、2001年に製造販売を開始しました。しかし、中国産除虫菊の品質低下と価格高騰を受け、段階的にケニア産の除虫菊へと切り替え、この度100%ケニア産となりました。

### 高品質で安定した除虫菊を求めて

りんねしゃの使用する除虫菊は、ケニアのナクル郡で有機栽培されています。ケニアは元々除虫菊の栽培に適した環境であり、さらに小規模農家が協力し合うことで、無農薬で質の高い除虫菊の栽培を実現しています。

かつてケニアは、1990年代には世界の除虫菊産

業の80%を占める一大産地でした。しかし、ケニアの除虫菊公社の度重なる汚職や不正により経営が急激に悪化し、生産農家への未払いが相次ぎました。これにより生産量は激減し、世界のシェアも2%未満にまで落ち込んでしまったのです。

このような状況に対し、りんねしゃは日本のODA(政府開発援助)を実施するJICAと連携。現地に飯尾純市氏の息子の裕光氏が赴き、7年もの歳月をかけて、高品質で安定した除虫菊の出荷体制を築き上げました。

ケニアでの除虫菊栽培は、安定した原料確保だけでなく、小規模農家の自立を支援するフェアトレードとしての役割も果たしています。

### 未来に向けて

りんねしゃは、かつて日本一の栽培地だった北海道の自社農場で除虫菊栽培を復活させています。ケニア産の方が安価で品質も同等以上ではあります。この取り組みは国内での技術継承を大きな目的としています。さらに、ケニアでのプロジェクトで確立された栽培技術が日本へ逆輸入され、国内の除虫菊栽培技術の向上にもつながっています。

りんねしゃは、蚊取り線香の取り組みを通じて、世界の殺虫剤使用問題にも向き合っています。世界では合成殺虫剤の多用により、殺虫剤耐性を持つ蚊による伝染病が深刻化していますが、これに対し、再び天然の除虫菊に注目が集まり、栽培面積も増大しています。しかし日本では、化学薬品への依存度が高く、家庭内農薬の問題が頭在化しています。りんねしゃは、このような日本の現状を変えるきっかけとして、世界を視野に入れながら原料入手の環境を整えていくことが重要だと考えています。

### 除虫菊の歴史

除虫菊の原産はバルカン半島。天然の殺虫成分「ピレトリン」を含み、1694年の発見以来、世界各地で殺虫剤として利用されてきました。日本では1886年ごろから栽培され、1900年には線香の技術が元となり、除虫菊粉末を原材料とする渦巻き型線香が発明されました。

日本は1945年ごろまで、世界最大の除虫菊生産国でしたが、戦後、ピレトリンに似た安価な「合成ピレスロイド」が米国から持ち込まれ天然ピレトリンに取って代わり始めたため、除虫菊生産は激減、1990年代にはほぼ消滅しました。

